

沖田 実・松原貴子(著)

ペインリハビリテーション入門

評者 諸橋 勇

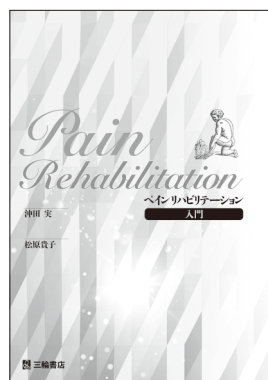
いわてリハビリテーションセンター機能回復療法部

私は若い頃から徒手療法に興味をもち学んできました。理学療法における痛みの治療は技術的な議論がほとんどで、痛みの原因を特に関節や筋肉、脊髄、末梢神経系に強引に求めていた感があります。また、明確な急性痛と慢性疼痛の区別もなく、痛みを症状レベルで捉え、社会心理的な痛みの側面は適応外であるような印象もあり、自ら治療の適応範囲を狭めていた時代が長く続きました。そのようななか、本書の著者らが2011年に上梓した「ペインリハビリテーション」は痛みの概念を整理し、痛みを詳細な解剖学的、生理・生化学的、神経学的な科学的な裏づけとともに捉え、痛みの治療のパラダイムシフトをもたらす内容に衝撃を覚えました。われわれの痛みの治療が、「療法」から「リハビリテーション」になった幕開けであり、理学療法士だけで執筆していることを誇りに思いました。

この「ペインリハビリテーション」はその内容が充実し、詳細な脳機能や組織学などにも言及しており、読み応えのあるかなり専門的な内容になっていました。そのため、初学者や経験の浅い理学療法士には基礎知識がないと十分に読みこなし、臨床へ応用できるまでには時間を要することが考えられます。そこで満を持して前書をよりわかりやすく、さらに臨床で使う多くの評価指標を付録で提示し、臨床で使いやすいように本書「ペインリハビリテーション入門」が発刊する運びになったと推察します。本書の内容はChapter1「痛みの理解」では痛みの定義、神経生理学、発生のメカニズムが、Chapter2「痛みの評価」として考え方、感覚評価、身体機能・活動評価、情動・認知評価、社会的・QOL評価に関して述べられています。Chapter3「痛みのマネジメント」では急性痛、慢性疼痛に対する具体的なリハビリテーションの要点について述べられています。また、文中の重要な専門用語には下線が引かれ、末

尾で用語解説をしていること、用いられている図も大きく見やすいことが特徴として挙げられます。

理学療法を行うなかで痛みの治療は最優先すべきものですが、多くの理学療法士が痛みの勉強を手技的な各論から始めるのが現状です。各種のガイドラインも発刊され、痛みの捉え方やアプローチ方法が確実に変遷してきていることが示されています。今後は慢性疼痛の原因と考えられる脳の機能不全に対しても、例えば認知行動療法などを用いる必要も増えると考えます。痛みの全体像や基本を学ぶ初めの一步として、本書の内容を理解することは不可欠だと考えます。



B5判・168頁
定価：本体3,500円＋税
三輪書店刊，2019年